

# 風、光、力

小 菅 正 伸

校歌「空の翼」は数少ない私の好きな歌の1つである。これまでにこの歌を何回歌ったことであろうか。なかでも「風、光、力、若きは力ぞ」という部分が特に気に入っている。

初めてこの歌を歌ったのは今から46年前、私が中学部に入学した時である。それ以来、関学に関係する行事があるときは必ずこの歌を歌ってきた。学内行事は言うに及ばず、学外でも同窓の集まりや学生スポーツの試合など、大声を出してこの歌を歌った経験は、その回数を数え上げるときりが無い。

関西学院に集い、そこで学ぶ学生・生徒・児童には、「風」のように爽やかであって欲しいし、「世の光」として行動する人であって欲しい。またそれと同時に、何よりも「力強く」あって欲しい。この歌を歌うとき、つねにこのことを願っている。学生諸君に対してそうであることを期待し、自分もそうでありたいと想っている。

スヌーピーの次の台詞のように、今では「空の翼」は私に元気を与えてくれる応援歌になっている。

“Sometimes it's only a little thing that gives us hope ... A smile from a friend, or a song, or the sight of a bird soaring high above the trees.” (PEANUTS, May 17, 1971)

昨今、次世代を担う人材として「世界を舞台に活躍できる人」や「経済社会の発展を牽引するグローバル人材」が盛んに議論されているけれども、時代の要請がどのように変わろうとも、関西学院は「変えるべきは変えるが、守るべきは守る」必要がある。変わりゆく時代のなかで「空の翼」が今後も変わることなく歌い続けられることを願っている。

(副学長・商学部教授)